

令和7年度 ふくしま学力調査 報告書【概要版】

令和7年11月5日
福島県教育委員会

1 ふくしま学力調査について



1 調査の目的

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

2 調査実施日

令和7年4月23日（水）～5月9日（金）の10日間

※ 各学校において期間の中から1日を選択し、全学年同日に実施。

3 参加学校数・参加人数

（1）小学校 381校

※ 義務教育学校前期課程及び県立特別支援学校小学部を含む。以下同じ。

（2）中学校 211校

※ 義務教育学校後期課程及び県立特別支援学校中学部を含む。以下同じ。

（3）児童生徒数（人）（質問紙を含むいずれかの教科を1つ以上実施した児童生徒の人数）

小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
13, 366	13, 588	13, 824	12, 554	12, 610

4 調査事項

（1）教科に関する調査

① 小学校第4学年～第6学年 国語、算数

② 中学校第1学年・第2学年 国語、数学

（2）質問紙調査

○ 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項

5 結果の活用について

（1）児童生徒の学習改善への活用

各学校は、個人結果票等を基に児童生徒に学習改善に向けたアドバイスを行う。また、個人結果票を保護者と連携するための資料とし、家庭学習の充実につなげていく。

（2）各学校の授業改善への活用

各学校は、結果から児童生徒の「学力のレベル」や「学力の伸び」の状況を分析し、学力を伸ばした可能性の高い取組を校内で共有するなど、学力向上のプラン等を見直し、今後の授業改善につなげていく。

6 「学力のレベル」と「学力の伸び」について

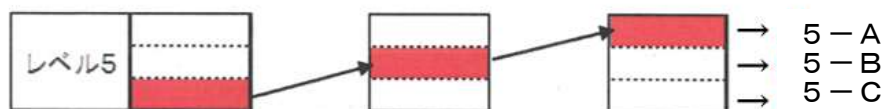
各学年のレベルの範囲（白が該当学年のレベルの範囲です）

	小4	小5	小6	中1	中2	中3	レベル	レベル(3分割)	数値
レベル12							レベル12	12-A	36
								12-B	35
								12-C	34
レベル11							レベル11	11-A	33
								11-B	32
								11-C	31
レベル10							レベル10	10-A	30
								10-B	29
								10-C	28
レベル9							レベル9	9-A	27
								9-B	26
								9-C	25
レベル8							レベル8	8-A	24
								8-B	23
								8-C	22
レベル7							レベル7	7-A	21
								7-B	20
								7-C	19
レベル6							レベル6	6-A	18
								6-B	17
								6-C	16
レベル5							レベル5	5-A	15
								5-B	14
								5-C	13
レベル4							レベル4	4-A	12
								4-B	11
								4-C	10
レベル3							レベル3	3-A	9
								3-B	8
								3-C	7
レベル2							レベル2	2-A	6
								2-B	5
								2-C	4
レベル1							レベル1	1-A	3
								1-B	2
								1-C	1

(1) 学力のレベル

全ての問題に難易度を設定し、「どのくらい難しい問題を解く力があるか」を「学力のレベル」で表す。「学力のレベル」はレベル1からレベル12までであるが、測定は各学年7つのレベルで行う。なお、福島県で中学3年生は実施しないため、「学力のレベル」はレベル11までである。

さらに、1つの「学力のレベル」は3分割され、「学力の伸び」が詳細に分かる。例えば、同じレベル5でも、「学力のレベル」が高くなるとバーの位置が上がる。



(2) 学力の伸び

集計対象となる児童生徒の「学力のレベル（3分割）」を数値化し、前回調査との差を計算する（例：1-Cは“1”、11-Aは“33”）。

(3) 「学力が伸びた児童生徒」の定義

「学力のレベル（3分割）」を数値化した数値が、前年度から1以上増加した児童生徒を「学力が伸びた児童生徒」と捉える。

2 調査結果から見える県全体としての傾向

1 教科に関する調査の結果から

【国語】

(1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P8) 【報告書 P9】

- 全ての学年において、令和6年度調査から「学力のレベル」の数値が1～2上がっており、学力が伸びている。
- 小学校5年生が最も伸びた児童生徒の割合が大きく、6割以上の児童生徒が令和6年度調査から学力を伸ばしている。
- 年度の異なる同じ学年集団の比較では、小学6年生と中学1年生の「学力のレベル」の平均が、令和6年度調査から1下がり、他の学年は令和6年度と同じである。

(2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P9～10) 【報告書 P10～11】

- 同じ学年集団の経年比較では、小学6年生は、平均の「学力のレベル」が、令和6年度調査のレベル6からレベル7に1上がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較から、全ての学年において、上位レベルに属する児童生徒の割合は少なく、中位レベルに属する児童生徒の割合が大きい傾向がある。

(3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P13～14) 【報告書 P14～15】

- 全ての学年において、最上位の児童生徒が属するレベルが、令和6年度調査と比べて上がっている。
- 学年が上がるにつれて、中位層（上位から25%～75%に位置する児童生徒が属するレベル）の「学力の伸び」が、最上位の児童生徒が属するレベルほど上がっていない。

全ての学年において数値が1～2増加しており、学力が伸びている。一方、上位レベルに属する児童生徒の割合が小さくなっているとともに、中位層の生徒の「学力の伸び」が小さい。

これらのことから、国語科の学習を通して、「何ができるようになるか」を児童生徒と共有し、改めて学習指導要領改訂の趣旨や各領域の指導事項の意図するところを確認して、学習を進めることが大切である。併せて、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」も具体的に示し、児童生徒が見通しをもって主体的・対話的で深い学びにつながるように授業をコーディネートすることも大切である。

【算数・数学】

(1) 県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化 (P8) 【報告書 P9】

- 全ての学年において、令和6年度調査から「学力のレベル」の数値が2上がっており、学力が伸びている。
- どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和6年度調査から学力を伸ばしている。

(2) 県全体の「学力のレベル」の分布 (P11～12) 【報告書 P12～13】

- 年度の異なる同じ学年集団の比較では、全ての学年において平均の「学力のレベル」は、令和6年度調査とほぼ同じである。
- 同じ学年集団の経年比較では、小学6年生と中学1年生において平均の「学力のレベル」が、令和6年度調査から1上がり、他の学年は同じである。
- 同じ学年集団の経年比較では、令和6年度調査と比べると全ての学年において、上位レベルに属する児童生徒の割合が大きく、下位レベルに属する児童生徒の割合が小さい傾向があり、伸びがみられる。

(3) 県全体の「学力の伸び」の状況 (P15～16) 【報告書 P16～17】

- 小学校6年生、中学校2年生の、上位から25%に位置する児童生徒が属するレベルについて、令和6年度調査と令和7年度調査の数値の伸び幅を比べると、令和7年度調査の方が数値の伸び幅が大きく、学力が伸びている。
- 中学校1年生の中位層（上位から25%～75%に位置する児童生徒が属する）の「学力の伸び」が小さい。

全ての学年において数値が2増加しており、学力が伸びている。また、どの学年も、約6割から7割の児童生徒が、令和6年度調査から学力を伸ばしている。さらに、令和6年度調査と比べ、上位レベルに属する児童生徒の割合が増え、下位レベルに属する児童生徒の割合が減っていることから、全体的な学力の伸びが確認できる。一方、学年が上がるにつれて、中央のレベルより下位の児童生徒の割合が大きくなっている。

これらのことから、早い段階でつまづきを解消できるよう、児童生徒一人一人がどのようなつまづきをしているのかを分析し、具体的な支援を行うなど、個別最適な学びを実現することが大切である。

2 児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」の関係から

【「学力のレベル」の高さと関係が見られた質問項目】

(1) 授業に関すること (P17) 【報告書 P25～32】

- ・ 授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだことがあるか
- ・ 課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりと持てるようになったことがあるか
- ・ 授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったことがあるか

(2) 学習意欲や学習環境に関すること (P18) 【報告書 P33～50】

- ・ 授業の前に、机の上に学習用具をそろえることができるか
- ・ 先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表することができるか
- ・ 学校の先生たちは、自分のよいところを認めてくれているか
- ・ 授業の内容は理解できているか

(3) 家庭での生活に関すること (P19) 【報告書 P51～63】

- ・ 学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間勉強しているか
- ・ 1か月に、何冊くらいの本を読むか
- ・ テレビゲームをしたり、携帯電話を使ったりすることについて、家の人と約束を決めているか

「ふくしまの『授業スタンダード』」や「『学びの変革』授業デザイン」を活用した授業改善や、一人一人の児童生徒が自己肯定感を高められるような互いのよさを認め高め合う学級経営、家庭学習の方法の指導や情報モラル教育の充実等により、児童生徒の資質・能力の育成を図っていくなど、「学力のレベル」の高さと関係が見られた質問項目を今度の取組に生かし、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばしていくことが大切である。

3 学校質問調査結果から見える学校の取組状況

(1) 学校・教職員の学力向上に向けた取組状況 (P20) 【報告書 P64～71】

- 小中学校とも、3年間で肯定的回答が増加している。
- 各学校において、校長のリーダーシップの下、学校の現状等について教職員間で話し合う機会を設ける等の組織的対応がなされている。また、授業研究に意欲を持って積極的に取り組む学校が増えている。
- 校長が教員の授業の様子を見て回る頻度について等、小中学校で肯定的回答に差がある質問項目があり、小中で取組がつながっていない校区がある可能性がある。

(2) 令和7年度の小学校6年生、中学校3年生に対する取組状況 (P20～21)

【報告書 P72～83】

【家庭学習の状況について】

- ほとんどの学校で、家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。
- 家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。
- 学習規律の確保の問題について、小学校では肯定的な割合が増えているが、4～5年生になるにつれて否定的な割合も増えている。

【国語の状況について】

- ほとんどの学校で、補充的・発展的な学習を行う時間が確保されている。
- 発問や対話を重視した授業が年々増加している。
- 発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導を充実させている。

【算数・数学の状況について】

- 現小学校6年生に対しては、補充的・発展的な学習を行う時間を確保する学校の割合が増加している。
- 継続して、児童生徒に自ら解決の方法を考えさせる発問がなされてる。
- 現小学校6年生に対しては、授業のまとめの場面で、学習した内容をどのように活用できるかを児童に文章等で書かせる授業の割合が増加している。

(3) 調査結果の活用状況 (P21) 【報告書 P84～87】

- ほぼ全ての学校が、個人結果票を返却する機会を捉え、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。
- ほぼ全ての学校が、返却された結果帳票を用いてデータを分析し、指導にいかしている。
- 学力や非認知能力等を大きく伸ばした教員へ聞き取りを行った学校が年々増加している。
- 調査結果から把握した内容について全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が年々増加している。

これらの結果は、県全体としての傾向であり、そのまま各自治体や各学校・各学級においても同じであるとは限らない。県全体としての傾向を参考にしつつ、各自治体や各学校に送付されている結果帳票を活用し、詳細に分析することが重要である。その分析結果から実態を捉え、授業の質の向上や望ましい学級集団づくり等にかかしていくことで、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばしていくことが期待できる。

3 教科に関する調査の結果

(1) 県全体の平均正答率(%)と「学力のレベル」

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
国語	53.2	53.5	53.0	57.5	59.7
	6-C(16)	6-A(18)	7-C(19)	7-A(21)	8-B(23)
算数 数学	65.4	55.3	54.8	54.5	54.3
	5-C(13)	5-A(15)	6-B(17)	7-C(19)	7-A(21)

上段：平均正答率(%) 下段：平均の学力のレベル(数値)

(2) 県全体のカテゴリー別平均正答率(%)

【国語】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別 平均正答率		問題形式別 平均正答率		
	言葉の 使い方 特徴や	我が国 の文化 情報 の扱い 方	書く こと、 話す こと、 読む こと	読む こと	知識・ 技能	思考・ 判断・ 表現	選択 式	短答 式	記述 式
小学校4年	67.2	59.9	26.9	35.6	65.1	30.8	62.1	46.7	15.3
小学校5年	55.5	56.2	39.8	55.5	55.7	50.7	52.0	57.0	38.0
小学校6年	57.6	67.5	38.5	47.3	59.4	44.6	57.5	46.8	29.4
中学校1年	62.1	46.7	50.5	60.3	57.8	57.0	56.8	59.7	47.9
中学校2年	59.9	66.3	63.6	54.9	61.4	57.6	61.0	57.4	52.1

【算数・数学】

	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別 平均正答率		平均正答率 問題形式別		
	数と 計算	図形	測定(小4) 変化と関係 (小5・中1)	データ の活用	知識・ 技能	思考・ 判断・ 表現	選択 式	短答 式	記述 式
小学校4年	69.2	50.4	68.8	69.1	67.9	55.2	60.2	72.6	29.3
小学校5年	57.7	53.5	54.1	53.3	58.2	49.8	56.4	57.0	10.0
小学校6年	56.4	55.6	58.2	48.3	56.1	47.6	57.7	55.3	2.6
中学校1年	58.3	51.0	48.6	57.4	56.8	32.0	58.1	52.3	29.5
	教科の領域等別平均正答率				評価の観点別 平均正答率		平均正答率 問題形式別		
	数と 式	図形	関数	データ の活用	知識・ 技能	思考・ 判断・ 表現	選択 式	短答 式	記述 式
中学校2年	55.6	46.9	51.4	63.1	54.7	51.7	54.9	53.2	59.2

（３）県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化

○ 国語

学年	小４	小５	小６	中１	中２
現中２	R3 １ ８	R4 １ ８	R5 ２ １	R6 ２ ２	R7 ２ ３
現中１	R4 １ ５	R5 １ ９	R6 ２ ０	R7 ２ １	
現小６	R5 １ ６	R6 １ ８	R7 １ ９		
現小５	R6 １ ６	R7 １ ８			
現小４	R7 １ ６				

○ 算数・数学

学年	小４	小５	小６	中１	中２
現中２	R3 １ ４	R4 １ ６	R5 １ ７	R6 １ ９	R7 ２ １
現中１	R4 １ ４	R5 １ ６	R6 １ ７	R7 １ ９	
現小６	R5 １ ３	R6 １ ５	R7 １ ７		
現小５	R6 １ ３	R7 １ ５			
現小４	R7 １ ３				

※ 表の中の数値は、児童生徒の「学力のレベル（３分割）」を数値化したものである。

※ 表を横に見ると「同じ学年集団」の経年変化を、縦に見ると「年度の異なる同じ学年」を比較することができる。

○ 令和６年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合（％）（県全体）

	小学校５年生	小学校６年生	中学校１年生	中学校２年生
国語	６ ６． ９	５ ６． ４	５ ９． ７	４ ８． ６
算数・数学	６ ９． ５	７ ２． ３	６ ３． ２	７ １． ７

※ 小学校４年生の学力の伸びが見られるのは、令和８年度調査実施後となる。

【国語】

（同じ学年集団の経年比較）

- 全ての学年において、前年度から数値が１～２上がっており、学力が伸びている。
- 小学校５年生の６割以上が、前年度から学力を伸ばしている。
- 前年度から学力を伸ばした中学校２年生の割合が、５割程度にとどまっている。

（年度の異なる同じ学年の比較）

- 小学校４・５年生は前年度と同じ数値である。
- 小学校６年生、中学１年生は前年度より数値が１低くなっている。

【算数・数学】

（同じ学年集団の経年比較）

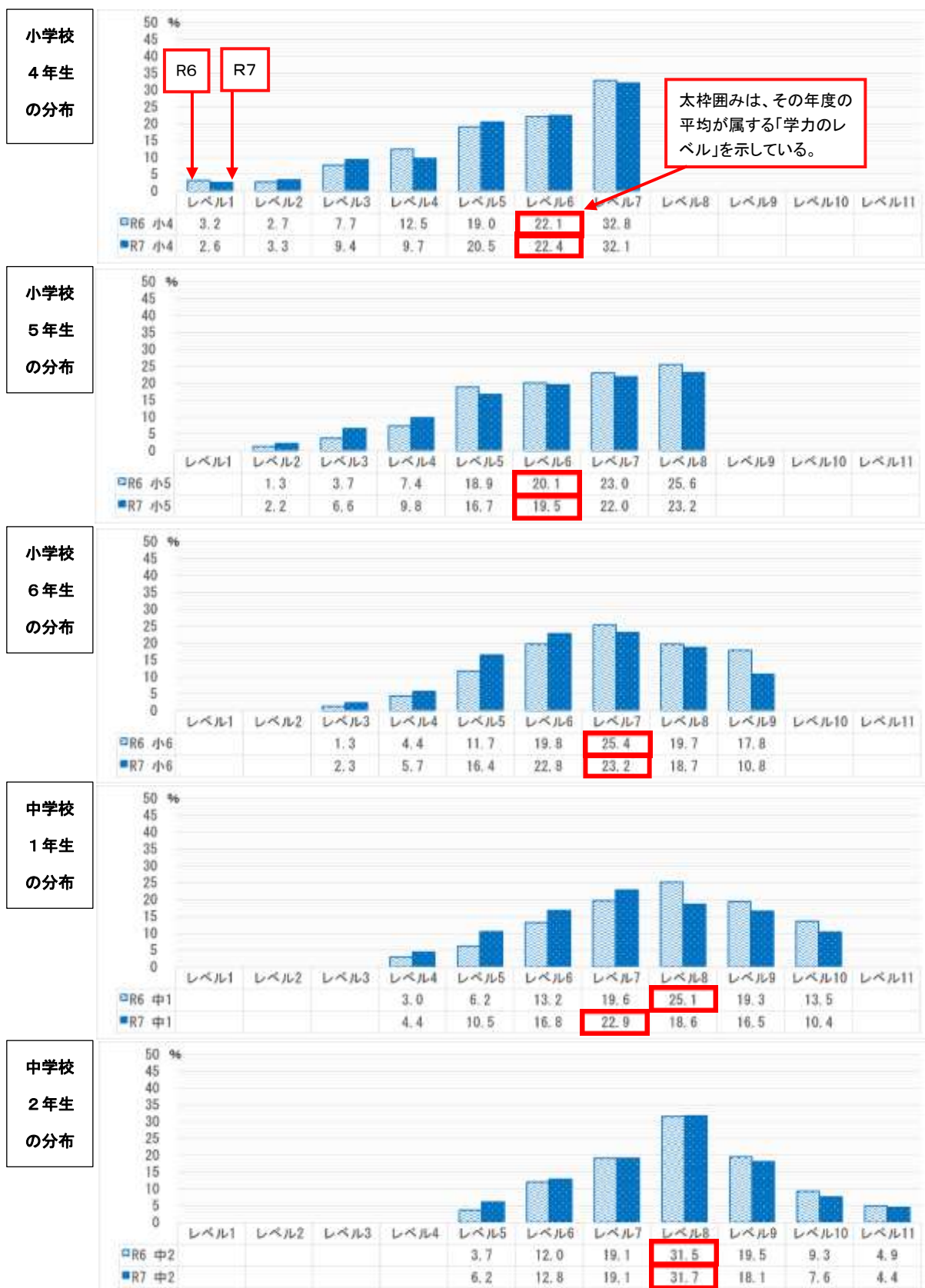
- 全ての学年において、前年度から数値が２上がっており、学力が伸びている。
- どの学年も、約６割から７割の児童生徒が、前年度から学力を伸ばしている。

（年度の異なる同じ学年の比較）

- 全ての学年において、前年度と同じ数値である。

（４）県全体の「学力のレベル」の分布 ① 国語

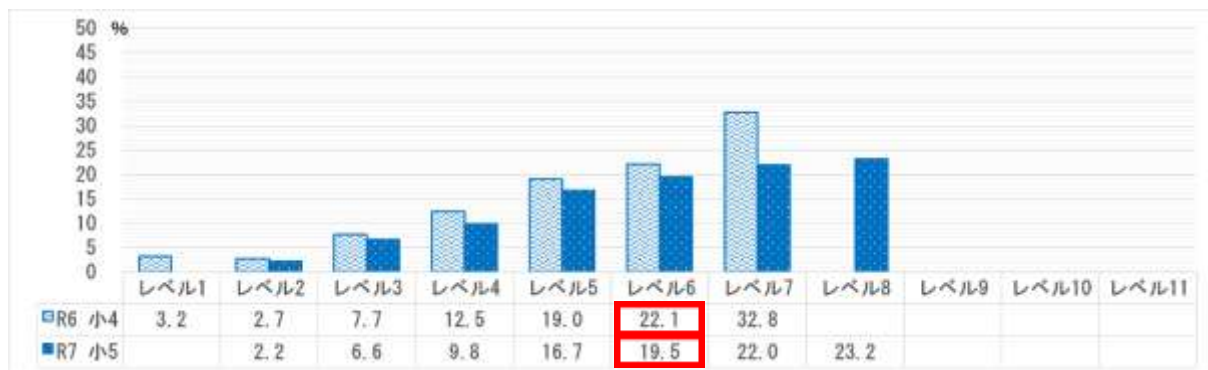
【年度の異なる同じ学年の比較（国語）】



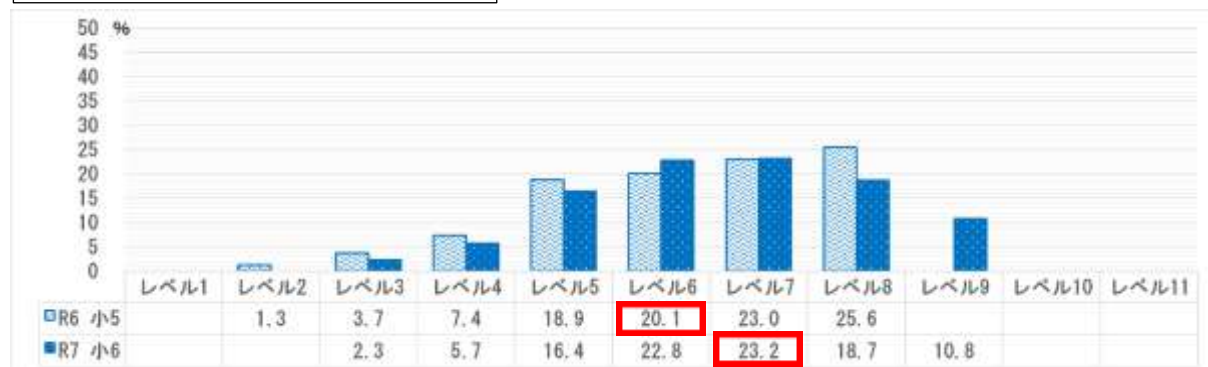
※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は、四捨五入しているので合計が 100%にならない場合がある。

【同じ学年集団の経年比較（国語）】

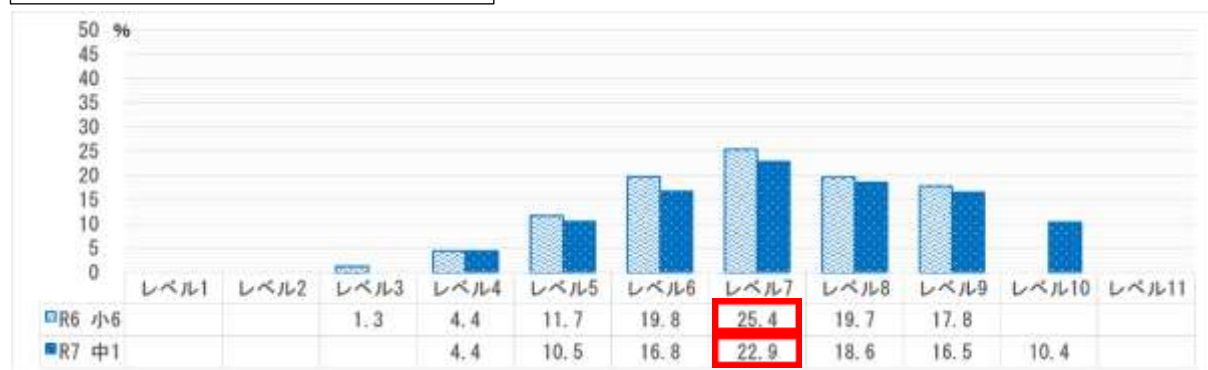
R6小学校4年生 → R7小学校5年生



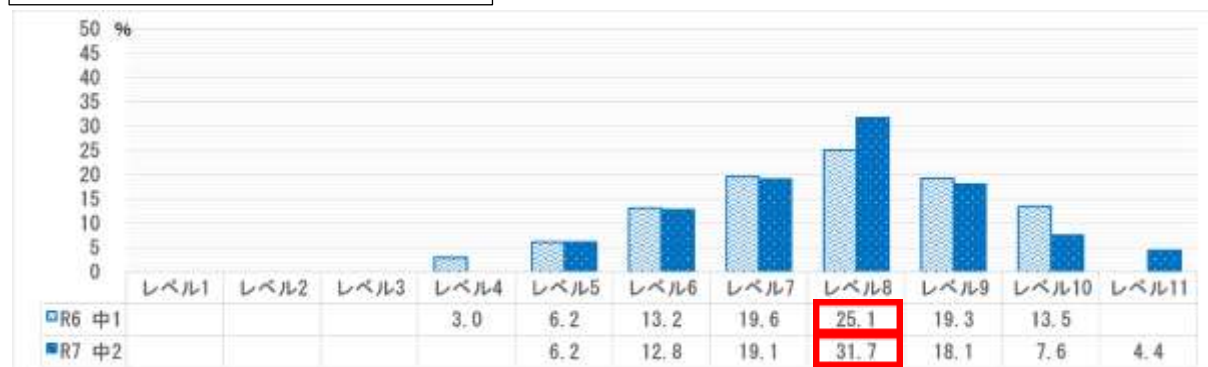
R6小学校5年生 → R7小学校6年生



R6小学校6年生 → R7中学校1年生



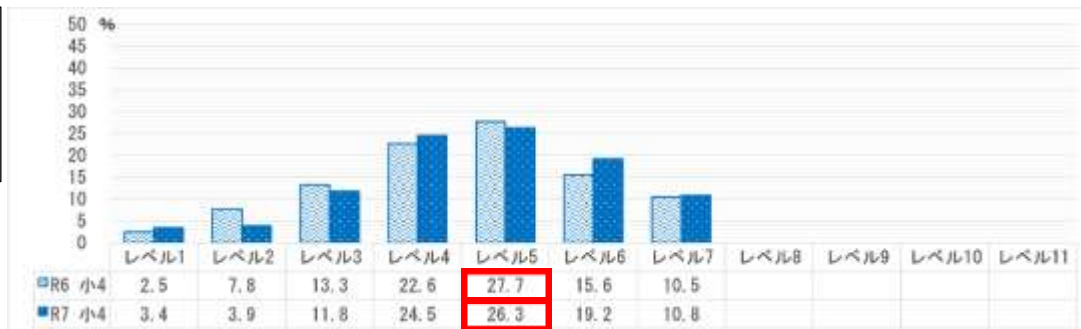
R6中学校1年生 → R7中学校2年生



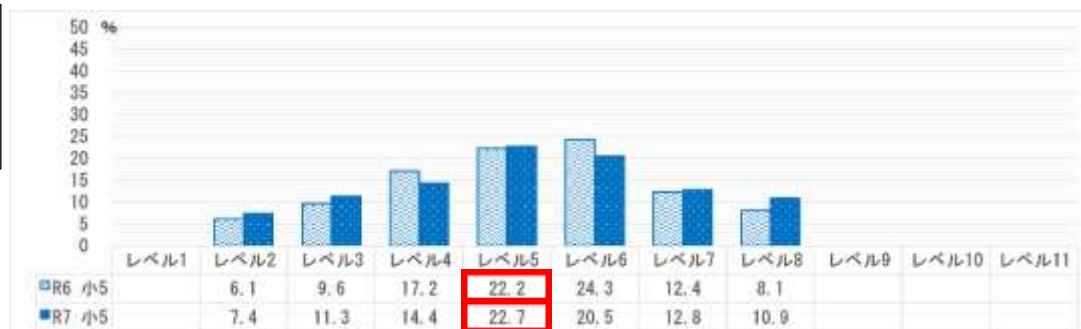
（４）県全体の「学力のレベル」の分布 ② 算数・数学

【年度の異なる同じ学年の比較（算数・数学）】

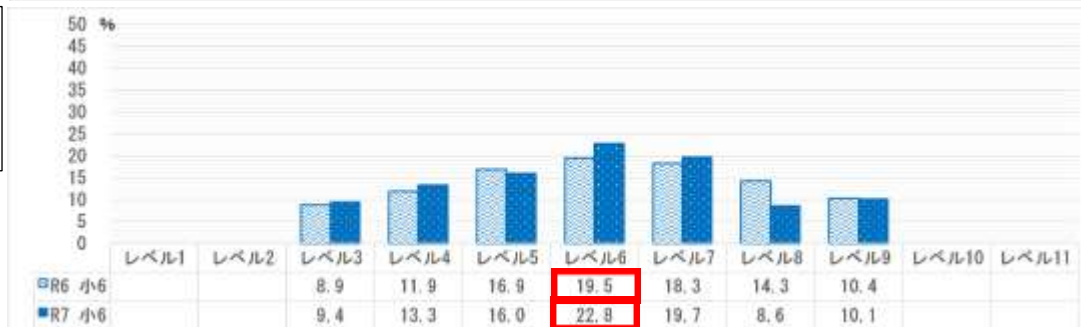
小学校
4年生
の分布



小学校
5年生
の分布



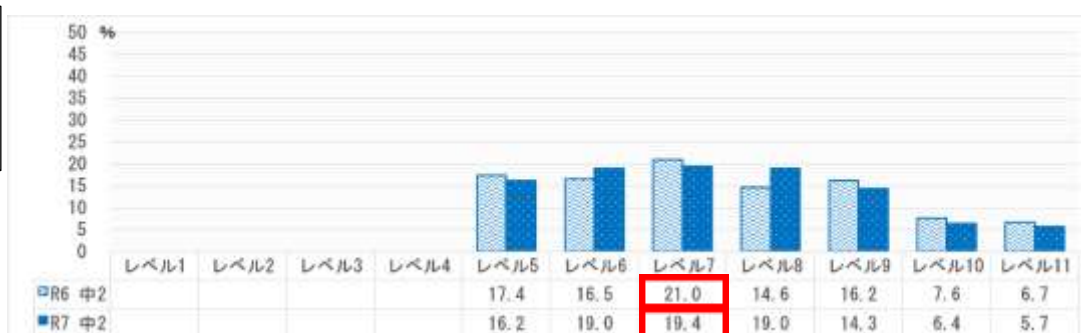
小学校
6年生
の分布



中学校
1年生
の分布



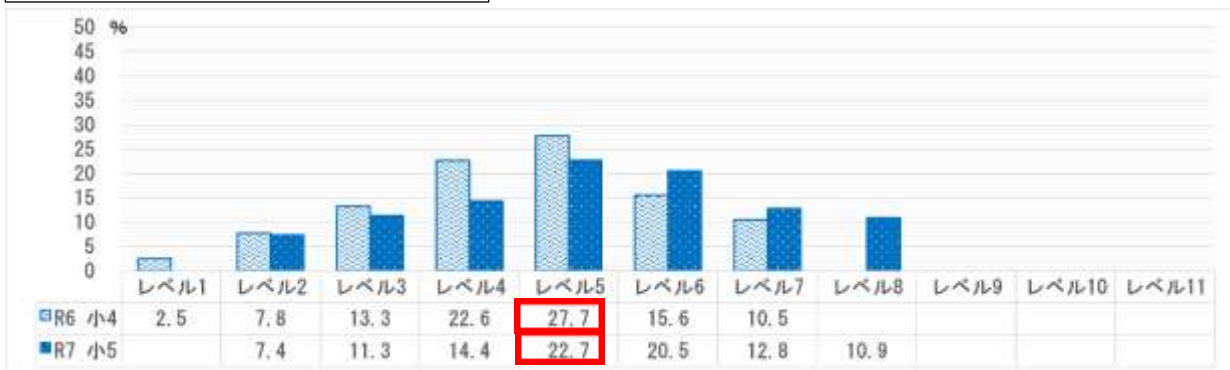
中学校
2年生
の分布



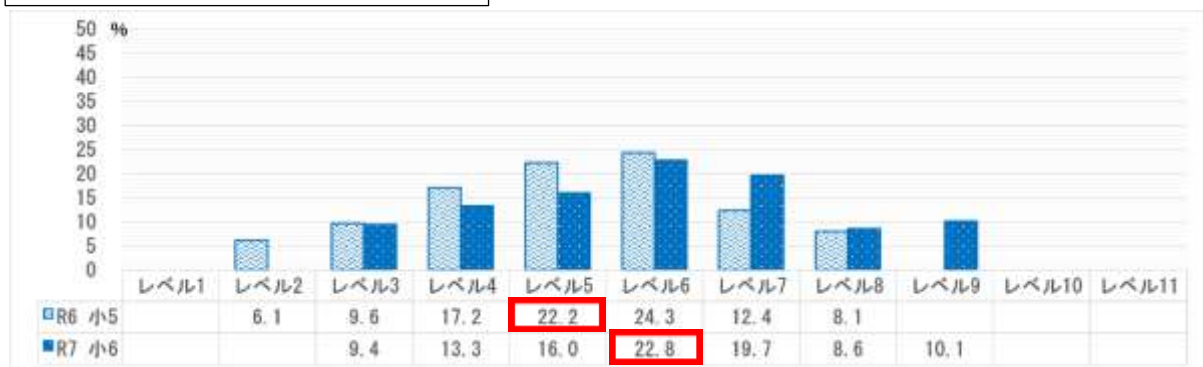
※ 学力の各レベルに属する児童生徒数の分布割合は四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

【同じ学年集団の経年比較（算数・数学）】

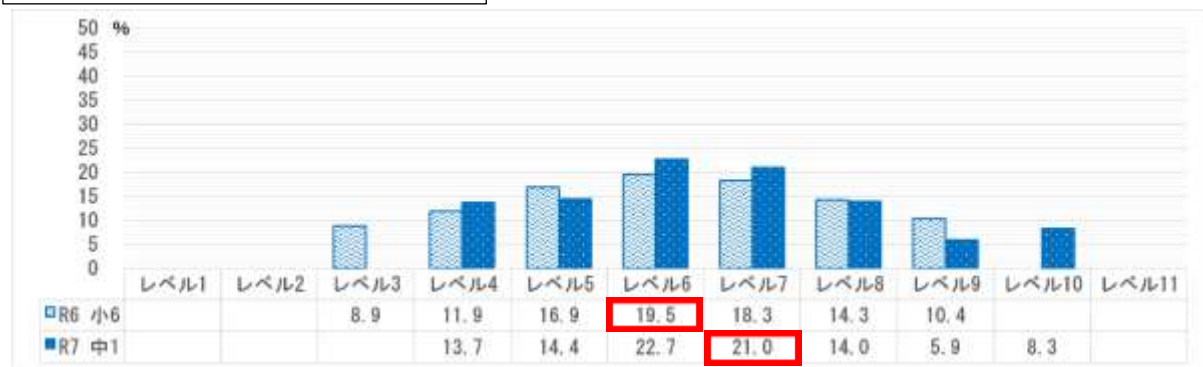
R 6 小学校 4 年生 → R 7 小学校 5 年生



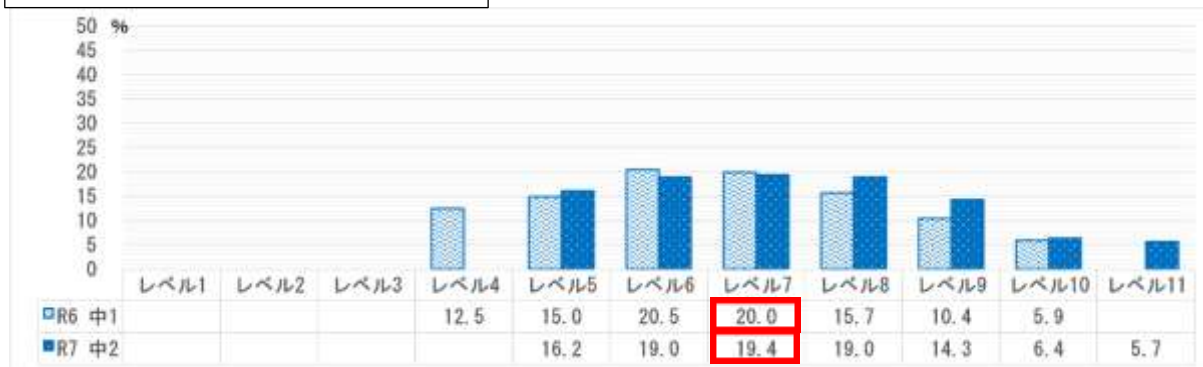
R 6 小学校 5 年生 → R 7 小学校 6 年生



R 6 小学校 6 年生 → R 7 中学校 1 年生



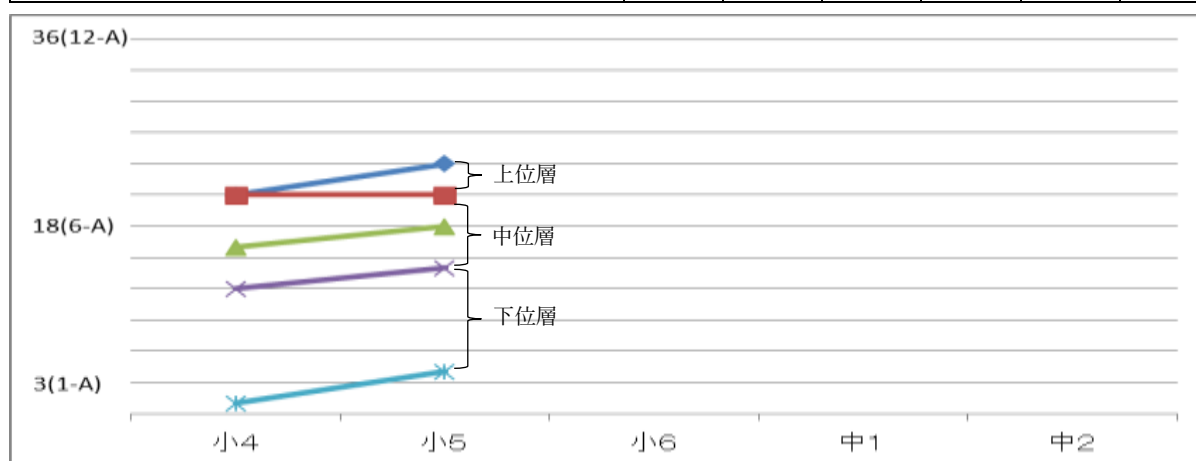
R 6 中学校 1 年生 → R 7 中学校 2 年生



(5) 県全体の「学力の伸び」の状況 ① 国語

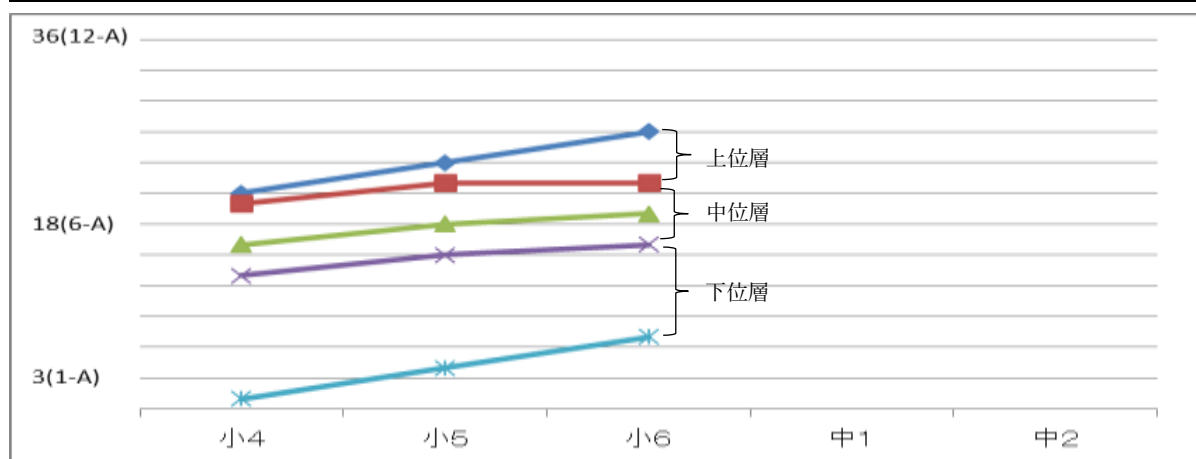
【現小学校5年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
最上位の児童が属するレベル	21	24	－	－	－	－
上位から25%に位置する児童が属するレベル	21	21	－	－	－	－
中央に位置する児童が属するレベル	16	18	－	－	－	－
上位から75%に位置する児童が属するレベル	12	14	－	－	－	－
最下位の児童が属するレベル	1	4	－	－	－	－



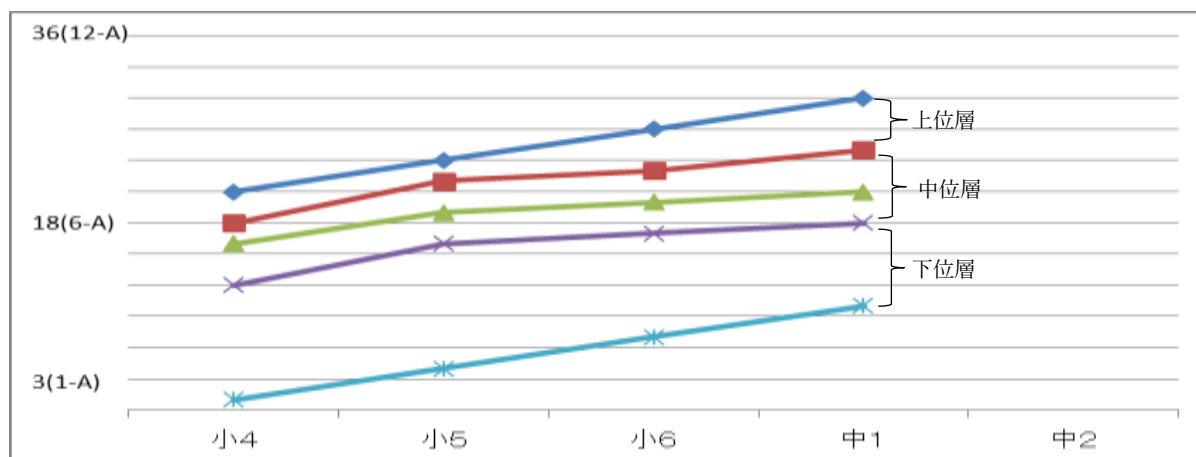
【現小学校6年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	－	－	－
上位から25%に位置する児童が属するレベル	20	22	22	－	－	－
中央に位置する児童が属するレベル	16	18	19	－	－	－
上位から75%に位置する児童が属するレベル	13	15	16	－	－	－
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	－	－	－



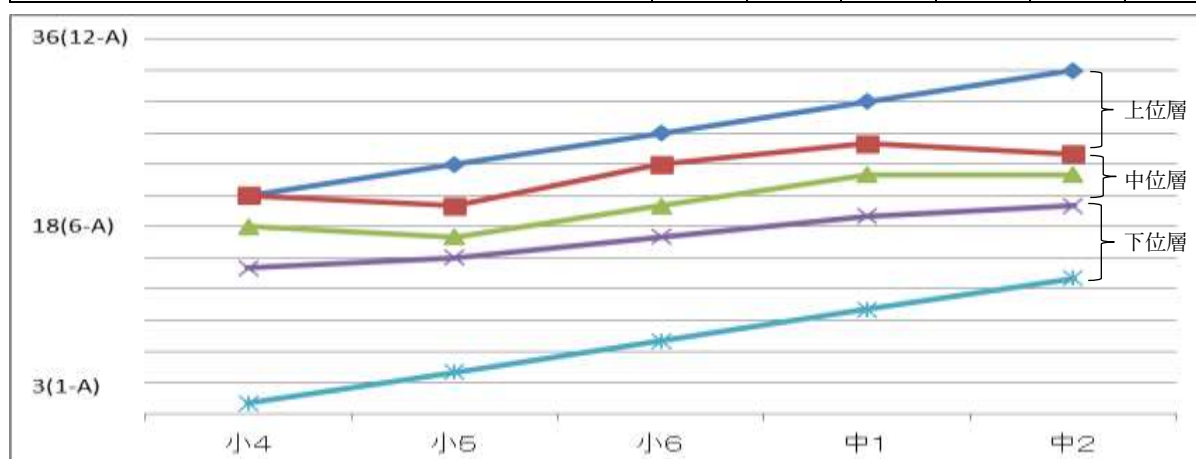
【現中学校 1 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
最上位の児童生徒が属するレベル	21	24	27	30	－	－
上位から 25%に位置する児童生徒が属するレベル	18	22	23	25	－	－
中央に位置する児童生徒が属するレベル	16	19	20	21	－	－
上位から 75%に位置する児童生徒が属するレベル	12	16	17	18	－	－
最下位の児童生徒が属するレベル	1	4	7	10	－	－



【現中学校 2 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
最上位の児童生徒が属するレベル	21	24	27	30	33	－
上位から 25%に位置する児童生徒が属するレベル	21	20	24	26	25	－
中央に位置する児童生徒が属するレベル	18	17	20	23	23	－
上位から 75%に位置する児童生徒が属するレベル	14	15	17	19	20	－
最下位の児童生徒が属するレベル	1	4	7	10	13	－



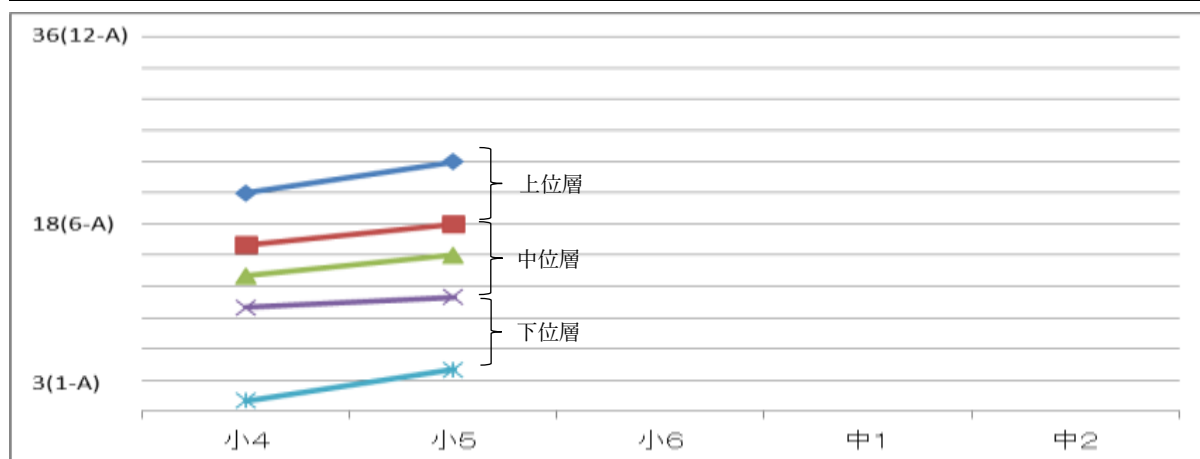
【国語】

- 全ての学年において、上位から 50%～75%の児童生徒が属するレベルが、令和 6 年度調査と比べて数値が上がっている。
- 学年が上がるにつれて、中位層（上位から 25%～75%に位置する児童生徒が属するレベル）の「学力の伸び」が、最上位の児童生徒が属するレベルほど上がっていない。

（５）県全体の「学力の伸び」の状況 ② 算数・数学

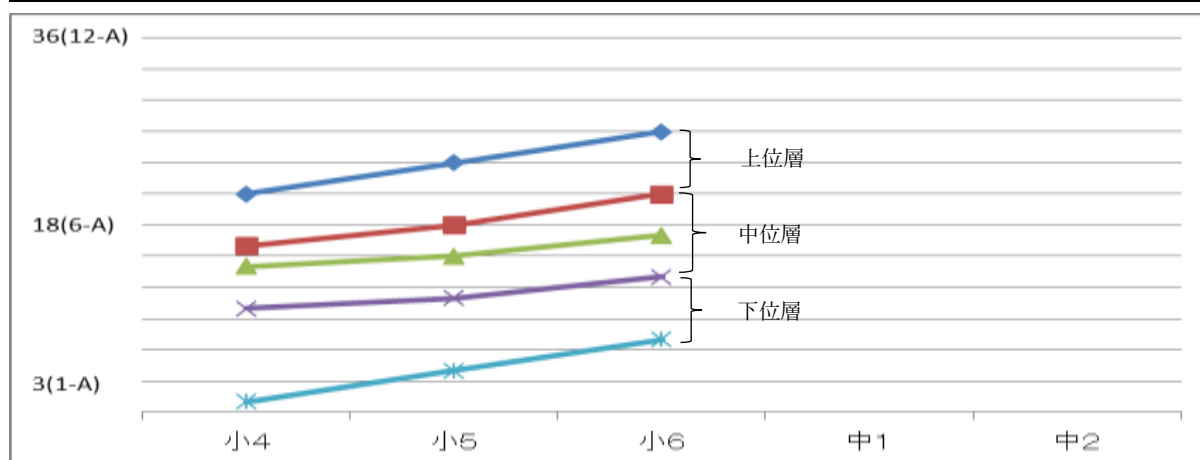
【現小学校５年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	－	－	－
上位から 25%に位置する児童が属するレベル	16	18	－	－	－
中央に位置する児童が属するレベル	13	15	－	－	－
上位から 75%に位置する児童が属するレベル	10	11	－	－	－
最下位の児童が属するレベル	1	4	－	－	－



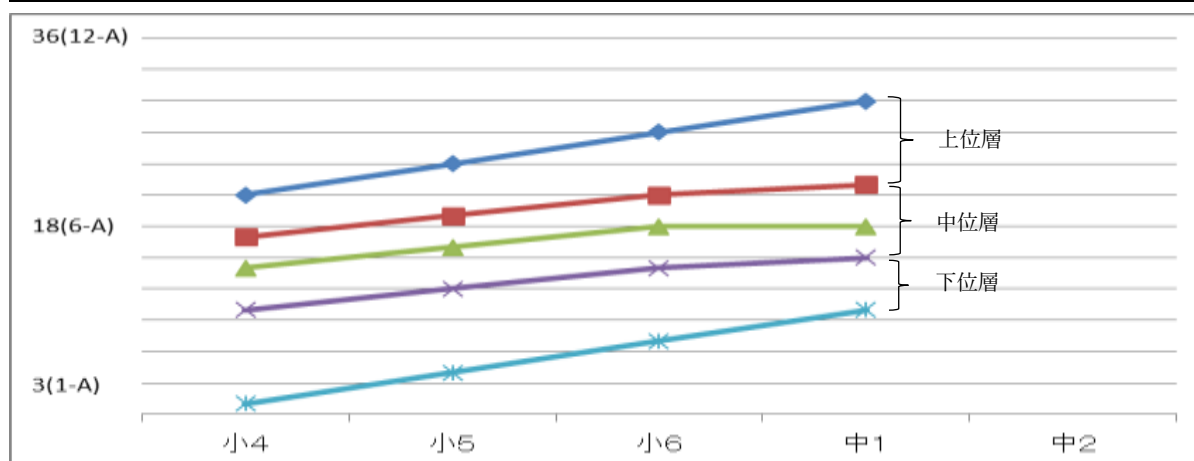
【現小学校６年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の児童が属するレベル	21	24	27	－	－
上位から 25%に位置する児童が属するレベル	16	18	21	－	－
中央に位置する児童が属するレベル	14	15	17	－	－
上位から 75%に位置する児童が属するレベル	10	11	13	－	－
最下位の児童が属するレベル	1	4	7	－	－



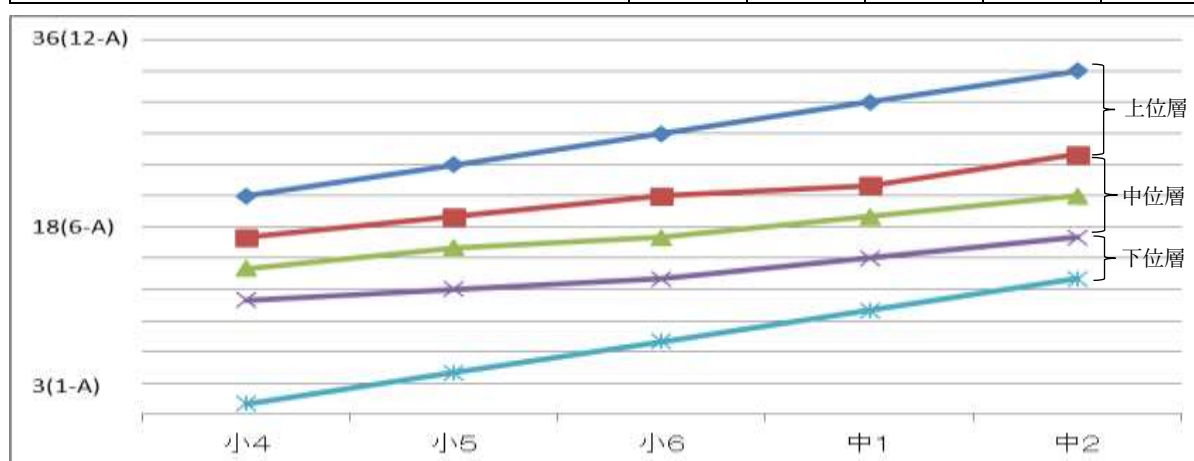
【現中学校 1 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	24	27	30	－
上位から 25%に位置する生徒が属するレベル	17	19	21	22	－
中央に位置する生徒が属するレベル	14	16	18	18	－
上位から 75%に位置する生徒が属するレベル	10	12	14	15	－
最下位の生徒が属するレベル	1	4	7	10	－



【現中学校 2 年生】

学年	小4	小5	小6	中1	中2
最上位の生徒が属するレベル	21	24	27	30	33
上位から 25%に位置する生徒が属するレベル	17	19	21	22	25
中央に位置する生徒が属するレベル	14	16	17	19	21
上位から 75%に位置する生徒が属するレベル	11	12	13	15	17
最下位の生徒が属するレベル	1	4	7	10	13



【算数・数学】

- 小学校 6 年生、中学校 2 年生の、上位から 25 %に位置する児童生徒が属するレベルについて、令和 6 年度調査と令和 7 年度調査の数値の伸び幅を比べると、令和 7 年度調査の方が数値の伸び幅が大きく、学力が伸びている。
- 中学校 1 年生の中位層（上位から 25 %～75 %に位置する児童生徒が属する）の「学力の伸び」が小さい。

4 児童生徒質問紙調査結果と「学力のレベル」

(1) 授業に関すること

①調査結果から

- 「学力のレベル」が高い児童生徒は、学習課題を把握したり、話合いや交流を通して自分の考えをもったり、学習したことと既習事項を関連付けたりする傾向が見られた。
- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、学力向上に寄与している。

②指導に当たって

- ◎ 教材との出会わせ方を工夫し、子どもの問いや思い・願いを引き出し、学習課題を理解しているかを確認し、全ての子どもが自ら学び出そうとする導入にすることが大切である。
- ◎ 子どもが自己調整しながら個別最適な学びを進め、多様な他者と協働することをおして、自分の考えを確かにしたり、新たな考えに気付いたり、磨き上げたりする展開にすることが大切である。
- ◎ 「まとめ・振り返り」において、「何が分かり、何ができるようになったのか、どのように学習したか」を、子どもが自覚できる終末にすることが大切である。

【「ふくしまの『授業スタンダード』」より】

- ・ 「何を学習するか」「何ができればよいか」を明確にするために、「問い」や「思い・願い」を基に子どもたちの気付きや発言などをつないで焦点化し、学習課題を設定しましょう。
- ・ 思いや考えを広げ深めることができるようにするために、児童生徒の考えを基に話合いをコーディネートし、ねらいに迫りましょう。
- ・ 子ども自身の言葉で、学習課題に対応したまとめを表現できるようにします。また、板書やノートなどを基に「どのように学習してきたか」を子どもが振り返ることができるようにしましょう。

【『学びの変革』授業デザイン』より】

- 「学び出す」…全ての子どもが、結果の見通しや、解決方法の見通しをもち、自ら動き出そうとする導入にします。
- 「学び合う」…全ての子どもが、友達の話に耳を傾け、自分の考えを確かにしたり、新たな考えに気付いたり、磨き上げたりする展開にします。
- 「学び取る」…全ての子どもが、今日の授業で「自分は何が分かり、何ができるようになったのか」を実感できる終末にします。

(2) 学習意欲や学習環境に関すること

①調査結果から

- 学習の準備を整える等の授業に臨む心構えや、他の児童生徒や教師から認められる等の自己肯定感と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 教師の話や友達の話聞き、自分の考えを伝えることができる授業における「聞く」「話す」を安定して実施できることと「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- 授業が分かったという実感と「学力レベル」の高さには強い関係が見られた。

②指導に当たって

- ◎ 授業に臨む心構えを大切にさせ、始業前に学習用具を準備させる等のよりよい学習習慣や学習に対する前向きな姿勢を育てることが大切である。
- ◎ 学級経営において、教師が積極的に児童生徒のよいところをほめたり、児童生徒同士が互いのよさを認め、高め合う雰囲気醸成したりすることにより、達成感を得たり、自己肯定感を高めたりすることが学力向上につながると考えられる。
- ◎ 分からないことを「分からない」と言える安全・安心に学べる学級風土や授業で何が分かり、どのようなことができるようになったのか、自分の言葉で学んだことを振り返ることが学習内容の整理と次の学習への意欲につながり、学力向上につながると考えられる。

【「ふくしまの『授業スタンダード』」より】

- ・ 学習規律について、発達段階を踏まえて共通実践することを大切にしましょう。
- ・ 普段の学校生活全般において、教師と子ども、子ども同士の「望ましい人間関係」を築いていくことを大切にしましょう。
- ・ 発達段階に応じて、児童生徒にどのような活動を通してどこまで考えさせるかを明確にした授業づくりを大切にしましょう。

【『学びの変革』授業デザイン」より】

「誰一人取り残さないために」

- ・ 「間違えても大丈夫」という心の安定が学びの基盤になります。
- ・ 「先生や友達から大切にされている」という実感が、前向きに取り組む意欲を高めます。
- ・ 「自分で選択・判断し、頑張ることができた」という実感が、自分で考える力を育みます。
- ・ 互いを認め合い、励まし合い、支え合う共感的な人間関係が、協働的な学びを促します。
- ・ 「自分はやればできる」という実感が、子どもの自己有用感を高め、学ぶ意欲を高めます。
- ・ 互いを認め合い、助け合い、高め合う学級の風土は、日々の積み重ねでつくられます。

（３）家庭での生活に関すること

①調査結果から

- 土曜日や日曜日など学校が休みの日に勉強する時間の長さや「学力のレベル」の高さに関係が見られた。また、小学校６年生以上では時間が長いほど関係が見られたが、小学校４・５年生は３時間程度が関係のピークであった。
- 読書の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。
- テレビゲーム（コンピュータゲーム）をしたり、携帯電話（スマートフォン）を使ったりすることについて、家の人と約束を決めていることと「学力レベル」の高さに関係が見られた。

②指導に当たって

- ◎ 土曜日や日曜日など休日における家庭学習の時間の確保に加えて、その内容や方法を工夫し、その取組を振り返り見直す機会を設ける等、学校と家庭・地域の連携を図りながら児童生徒の自己マネジメント力を育むことが大切である。
- ◎ 読書に親しむ機会を増やすことや読書環境を整えることなど、引き続き読書量を増やす取組をすることは、学力の向上に寄与するものである。今後も学校や地域の図書館などを活用し、児童生徒に幅広い読書活動を促すことが大切である。
- ◎ 学校での情報モラル教育（健康面への影響等も含む。）の充実に加え、学校と家庭が連携して子どものテレビゲームやスマートフォンの利用時間等のルールを決めるなどの取組を行っていくことが大切である。

【「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」より】

- ・ 学習内容に応じて宿題（復習、予習）を効果的に活用した授業に努めたり、授業で学習したことを活用できる場面や方法を紹介したりするなど、授業と家庭学習をつなげましょう。
- ・ 「心の支え」、「環境づくり」、「習慣づくり」の３つの視点で家庭・地域と協力・連携体制を築いて、「自己マネジメント力」を育んでいきましょう。
（家庭への働きかけとして）
- ・ 「心の支え」の視点から、家庭でのコミュニケーションを大切にしましょう。
- ・ 「環境づくり」の視点から、集中して学習できる環境を作ったり、家族と一緒に読書する機会を設けたりしていきましょう。
- ・ 「習慣づくり」の視点から、テレビやゲーム、スマホなどをするときのルールを決めましょう。また、「起床時刻」や「就寝時刻」、「学習を始める時刻」等の約束ごと、保護者と児童生徒が話し合い、家族みんなで規則正しい生活を心がけましょう。

5 学校質問調査結果から見える学校の取組状況

ふくしま学力調査では、児童生徒質問調査に加え、学校質問調査も行っています。ここでは、令和5年度調査から令和7年度調査までの3年分の回答状況を基に、児童生徒の学力向上、教員の授業改善に向けた学校の取組状況について整理しています。県全体の結果と自校の状況を比較し、今後力を入れたい取組や改善を図りたい取組などを考える参考にしてください。

(1) 学校・教職員の学力向上に向けた取組状況

- 小中学校とも、3年間で肯定的回答が増加している。
 - 各学校において、校長のリーダーシップの下、学校の現状等について教職員間で話し合う機会を設ける等の組織的対応がなされている。また、授業研究に意欲を持って積極的に取り組む学校が増えている。中学校では割合の増加傾向が見られた。
 - 校長が授業の様子を見て回る頻度について等、小中学校で肯定的回答に差がある質問項目があり、小中で取組がつながっていない校区がある可能性がある。
- ◎ 現状をしっかりと分析し、校長のリーダーシップの下、組織的に対応することが重要である。
- ◎ 教員同士の相互研究等を活性化することが授業改善につながると考えられる。
- ◎ 児童生徒の自己肯定感を高める取組が主体的な学びにつながると考えられる。
- ◎ 小中学校において取組に差がないか確認し、必要に応じて中学校区で共通実践をしていくことが重要である。

(2) 令和7年度の小学校6年生、中学校3年生に対する取組状況

県では、8月に令和7年度全国学力・学習状況調査の結果を「授業改善グランドデザイン」として公表しました。今回の調査対象であった小学校6年生と中学校3年生の取組をピックアップし、ふくしま学力調査の学校質問調査回答結果から見ていきます。小中学校の取組状況の違いにも着目して御覧ください。

※授業改善グランドデザインは県教育委員会HPに掲載されています。

URL:<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/707805.pdf>



- ほとんどの学校で、家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。
 - 家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。
 - 学習規律の確保の設問について、小学校では肯定的な割合が増えているが、4～5年生になるにつれて否定的な割合も増えている。
- ◎ 児童生徒が熱意をもって主体的に学習できるように、小中連携を重視した授業研究を行っていくことが重要である。家庭学習で取り組む内容については、児童生徒が自らの学びを調整する機会を設け、教師が適切に評価しながら意欲を引き出していく工夫が求められる。
- ◎ 学習規律の確保については、生徒指導の機能を生かした一貫した指導方針のもと、組織をいかした確実な指導の実施と、研修を含めて早期対応が大切である。

【現小学校6年生、中学校3年生に対する国語の状況について】

- ほとんどの学校で、補充的・発展的な学習を行う時間が確保されている。
- 発問や対話を重視した授業が年々増加している。
- 発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導を充実させている。

- ◎ どの学年においても、ふくしま学力調査を基に一人一人の実態を分析した上で、今後も補充的・発展的な学習を計画的に取り入れる必要がある。
- ◎ 全ての学年において、教師からの一方通行で画一的な授業ではなく、児童生徒の多様な考えをいかすことができる発問と対話によって、考えを深める授業へ転換していくことが必要である。
- ◎ 授業において根拠や理由を基に、自分の考えを書かせたり、話したりする力を育成するための指導が日常的になされている。

【現小学校6年生、中学校3年生に対する算数・数学の状況について】

- 現小学校6年生に対しては、補充的・発展的な学習を行う時間を確保する学校の割合が増加している。
- 継続して、児童生徒に自ら解決の方法を考えさせる発問がなされていた。
- 現小学校6年生に対しては、授業のまとめの場面で、学習した内容をどのように活用できるかを児童に文章等で書かせる授業の割合が増加している。

- ◎ どの学年においても、ふくしま学力調査を基に一人一人の実態を分析した上で、今後も補充的・発展的な学習を計画的に取り入れる必要がある。
- ◎ 全ての学年において、児童生徒自ら解決の方法を考えられる発問と対話によって、課題解決に導く授業が積極的に行われる必要がある。
- ◎ 一方的に教授する場面が多すぎないか確認し、教えるべきこと、考えさせるべきことのバランスを考えた授業改善が必要である。

（３）調査結果の活用状況

- ほぼ全ての学校が、個人結果票を返却する機会を捉え、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。
- ほぼ全ての学校が、返却された結果帳票を用いてデータを分析し、指導にいかしている。
- 学力や非認知能力等を大きく伸ばした教員へ聞き取りを行った学校が年々増加している。
- 調査結果から把握した内容について全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が年々増加している。

- ◎ ふくしま学力調査の「一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する」という目的について、ほぼ全ての学校が理解し、教育指導や指導計画の改善に活用できていると考えられる。
- ◎ 個人結果票を返却する際は、ほぼ全ての学校が児童生徒をほめ、助言する機会とする学校が多いことから、児童生徒の学習意欲等の向上に役立てることができていると考えられる。
- ◎ データを分析し、エビデンスに基づいて指導改善が進められていると考えられる。管理職、教務主任、学級担任、教科担任、養護教諭など、それぞれの立場に応じた分析がさらに進められることが期待される。
- ◎ 学力や非認知能力を大きく伸ばした教員の効果的と思われる取組を聞き取り、横展開することによって学校の強みを増やしていくことが期待される。

6 各学校における分析とその活用例について

1 児童生徒一人一人の「学力のレベルと学力の伸び」の可視化

各学校に配付されている「帳票40」には、以下のとおり前年度調査の学力のレベルとの比較により、「昨年度からの学力の伸び」が数値として示されている。

40 学校用

※K00年度より、学力調査（小・中学校共通）

学力分析データ（学力のレベル・伸び・学習方略・非認知）児童生徒別

○○○さくら小学校

本調査の「主要な」対象校（国、公立小・中学校）「学習方略」「非認知能力」の調査は、10～50校となっています。

数値が「真ん中」より「後」の場合は、赤字で表示しています。

1桁未満の学力の増加分（マイナス）の場合は、赤字で表示しています。

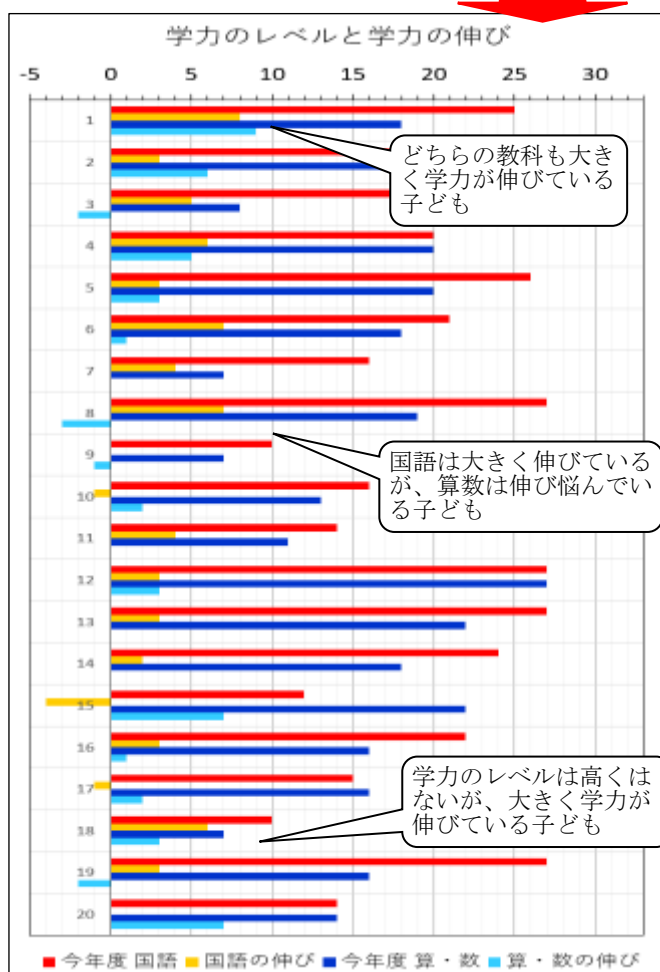
年度	学年	学年別調査実施校	学校コード	学校名	10年度調査						学力平均				
					学力番号	学年	級	性別	学力番号	学年	級	性別	市町村平均	県民平均	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****421	5	1	-	1	****421	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****422	5	1	-	1	****422	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****423	5	1	-	1	****423	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****424	5	1	-	1	****424	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****425	5	1	-	1	****425	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****426	5	1	-	2	****426	5	1	-	2	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****427	5	1	-	1	****427	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****428	5	1	-	1	****428	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****429	5	1	-	1	****429	5	1	-	1	
2024	01	○○○教育委員会	070700000	○○○さくら小学校	****430	5	1	-	2	****430	5	1	-	2	

本調査の特長の一つである「学力の伸び」から、児童生徒のどのような姿が見えてくるのか、数値だけでは見えにくいのではと考え、「学力のレベルと学力の伸び」を可視化する「グラフ化ツール」を作成し、県内全ての小・中学校、義務教育学校、県立特別支援学校小学部・中学部及び、市町村教育委員会へ配布し、「グラフ化ツール」の使い方及び活用事例についてオンライン説明会を実施した。

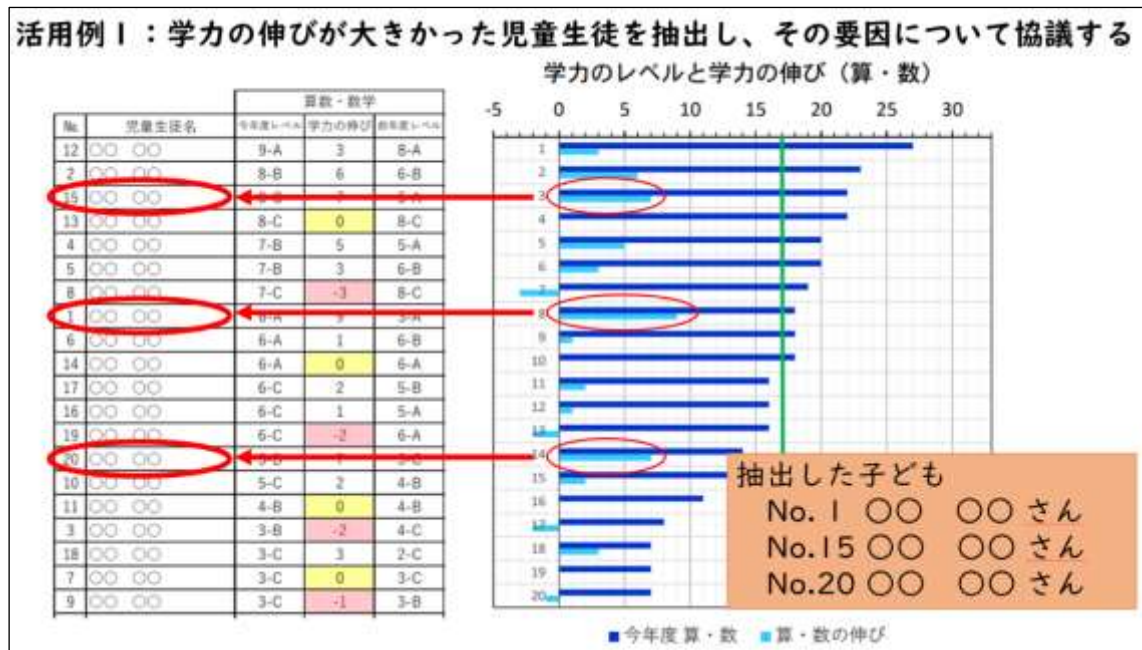
右のグラフは、「グラフ化ツール」によって作成された小学校6年生のグラフの例であり、児童生徒一人一人の国語と算数の「学力のレベル」と「昨年度からの学力の伸び」を表している。

このグラフから、例えば、どちらの教科も大きく学力が伸びている子どもや、国語の学力は大きく伸びているが、算数は伸び悩んでいる子ども、「昨年度からの学力の伸び」の状況

グラフ化ツールでは、教科ごとの学力のレベルと学力の伸びを表示するグラフも作成することができる。



これらのグラフを基に、児童生徒一人一人に寄り添い、称賛したり、励ましたりすることはもちろんだが、これらの結果を授業改善にいかすことが大切である。単に結果を見て、学力の状況を把握するだけでなく、例えば、学力が大きく伸びている子どもを、校内研究授業における抽出対象とし、事後研究会で学習への取組状況等を共有したり、伸び悩んでいる児童生徒に対する個別支援の方法を検討したりすることが考えられる。他にも、児童生徒一人一人にどのような変容があったのかを、生徒指導の面から話し合うことも考えられる。



活用例Ⅰ：学力の伸びが大きかった児童生徒を抽出し、その要因について協議する

<グループ協議>
抽出した児童生徒の学力が伸びた諸要因について、実践感覚から推測してみましょう。

Aグループ No. 1 〇〇 〇〇 さん
Bグループ No. 15 〇〇 〇〇 さん
Cグループ No. 20 〇〇 〇〇 さん

※グループで複数人を抽出して協議するパターンもあり

昨年度の学級担任です。実は2学期頃に…

先日保健室に〇〇さんが来た時のことですが…

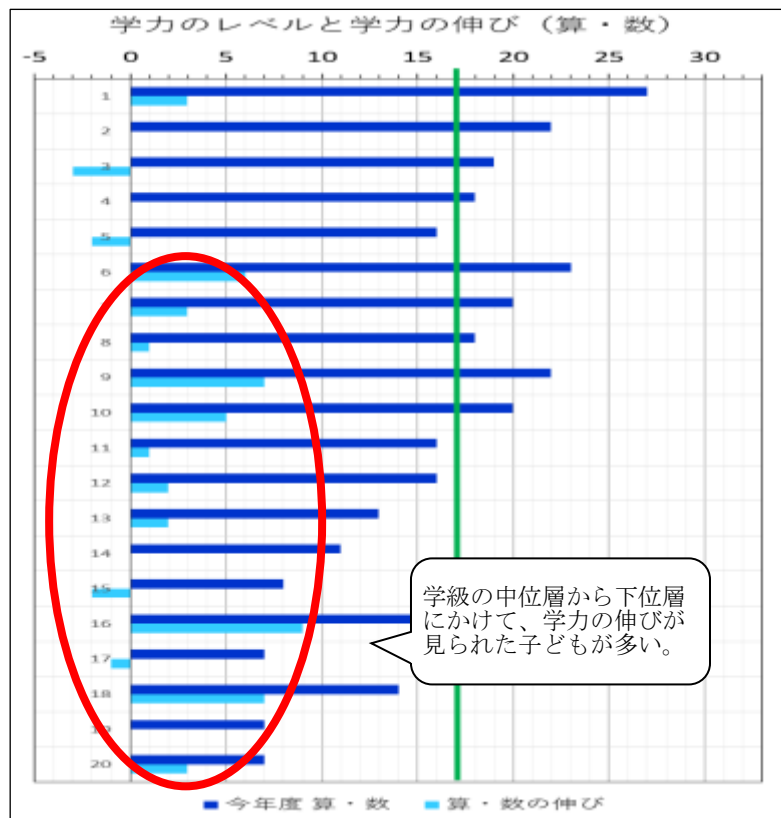
現在の教科担当から見ると、授業の対話の場面で〇〇さんはいつも…

私の教科では、〇〇さんに発見的な課題を与えるときがあります。すると…

2 学級全体の学力の伸びの傾向を捉える

グラフ化ツールでは、教科ごとの学力のレベルと学力の伸びのグラフを、昨年度の学級で昨年度の学力のレベル順に並べ替えることもできる。このように並べ替えることで、昨年度の学級の学力の伸びの傾向を捉え、それを基に、指導の特長（よさ）について協議するという活用法も考えられる。

例えば、下のグラフでは、中位層から下位層にかけて、学力の伸びが見られた子どもが多いことが分かる。この学級を指導していた先生の取組を互見授業等により共有することで、学校全体の授業改善につなげていきたい。どのような指導が学力の伸びによい影響を与えているかを協議してその特長（よさ）を明らかにし、それぞれの学級の実態に応じて、工夫しながらそれぞれの授業に取り入れていくことで、具体的な指導方法等の改善につなげられると考える。



活用例2：学級の学力の伸びの傾向から、指導の特長（よさ）について協議する

①学級の学力の伸びの傾向を捉える。

②学力を伸ばしている先生の授業を参観するなどして、指導の特長（よさ）について、全体で話し合う。

③明らかになった「よさ」を、学級の実態に応じて工夫しながらそれぞれの学級で取り入れる。

△△先生の学級は、
下位層の子どもの多くが
学力が大きく伸ばしてい
ますね。

私は授業を構想する
際には、～～という
ことを特に意識して
います。
また、授業中に発問
するときには…

私の学級の実態を考えると、
～～としてみるといいかも…

さらに、自校において、教科のどの領域、どの観点において強みや課題が見られるかについては、「帳票09」や「帳票28」から、学年全体や学級ごとの状況を把握することができる。さらには、必要に応じて「帳票01」から、児童生徒一人一人の採点結果を確認し、個別最適な学びにつなげることも大切である。

令和4年3月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めている。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものである。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていく。

【分析協力者プロフィール】

宮城教育大学 教職大学院 教授 田端 健人 氏

<研究>※科学研究助成事業（科研費）・基盤研究B

○研究題目「グローバル世界を視野とする学力・非認知能力の効果的学校モデル」

(2020-22年)

「学力/非認知能力を効果的に育成するスクールリーダーのデータサイエンス」

(2023-25年)

※ 本研究を進めるチームは、田端教授他7名

○研究の概要

- ・ 児童生徒の学力と非認知能力を向上させる「効果的学校」の姿を明らかにすること。
- ・ 校長のどのようなリーダーシップが、教職員のどのようなコラボレーションが、教師のどのような学級づくりや授業や支援が、児童生徒の学力と非認知能力を効果的に向上させるかを明らかにすること。

※ 全国学力・学習状況調査等を用いて、上記の研究を行っている。

<経歴等>

2019年4月～ 宮城教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻
(教職大学院) 教授(現職)

2021年4月～ 文部科学省 学力調査アドバイザー(現職)

<主な著書>

○『IRT分析ソフトEasyEstimationによる全国学力・学習状況調査の検証と経年比較』
(パイディア出版 2022年6月13日発行)

○『子どもの言葉データサイエンス入門ーjReadabilityの活用と検証ー』
(パイディア出版 2021年)

学力向上取組の成果

宮城教育大学教職大学院 教授 田端健人

令和7年度全国学力・学習状況調査、中3数学で、福島県の平均が全国差を0.095まで縮めました。過去6年間のデータで、全国平均差を0.100未満に縮小したのは、今年度が初めてです。一覧にすると、以下の表になります。

年度	H31	R3	R4	R5	R6	R7
中3数学 全国との平均差(d)	-0.121	-0.108	-0.169	-0.182	-0.173	-0.095

この表では平均差を、正答率のポイント差ではなく、効果量(d)で計算しているので、より精度の高い経年比較になっています。令和7年度小6算数も、全国差はd = -0.125で

したが、前年度の差 $d = -0.152$ より縮小しています。平均点は、集団規模が小さいほど変動しやすいですが、中3数学の平均点を上げるのは、市町村単位はもちろん、学校・学級単位でさえ決して容易ではありません。それが県単位で実現できたのは画期的です。まぐれでできたとは思えません。

でも、ひょっとすると福島県の現中3が他学年より、たまたま学力が高い集団だったとしたらどうでしょう。そんな不安もよぎります。そこでふくしま学力調査で、R7中3とR6中3の「年度の異なる同じ学年の比較（算数・数学）」を経年で追ってみました。すると確かにR7中3はR6中2時点では1年上の先輩たち（R5中2）より高レベル9～11の割合が多く、学力が高い集団になっていました。ところが、R5中1入学時点では、R4中1の方が明らかに高レベルなのです（R4中1がR5中1より低レベル4～6の割合が少なく、高レベル8～10の割合が多い）。さらにさかのぼって小6・小5時点を見ると、グラフや数値で両集団には甲乙つけがたい結果でした。それゆえ、R7中3は、R6中3と比べ、特に学力が高い集団だったわけではなく、中学校進学後に着実に学力を上げていったと推測できます。逆に言えば、R6中3集団も、全国平均差を0.100未満にする潜在的学力は十分にあったと考えられます。

上記表の各年度は、ふくしま学力調査を実施してきた年度に当たります。平成31年度の独自学力調査全県導入は、挑戦的な試みによる学力向上をめざした福島県の偉大な一歩でした。「学力の伸びを引き出した学校の取組事例集」は今年度第5号を迎えます。この取組事例集にも、ふくしま学力調査導入後の福島県の学力向上方針の進展が現れています。特に令和6年度は、様変わりしました。「自己効力感」「学級風土」「規範意識」「主体的・対話的で深い学び」の4カテゴリーに焦点を絞り、授業風景等の写真も掲載されるようになりました。「安心」や「認め合い」や「対話」といったキーワードが躍動しています。写真でも児童生徒が机を寄せ合い、考えを伝え合う様子が多く見られます。全県あげてのこうした取組が実を結び始めたのではないのでしょうか。

学力向上、それと両輪をなす非認知能力向上の一丁目一番地は、学校や学級や家庭の「安心安全」にあります。人間関係トラブルやいじめや虐待のある環境では子どもは委縮し、すくすく伸びることなどできません。安心安全が損なわれ、生徒指導案件に追われるなら、学力向上どころではありません。家族や教師や仲間たちから大切にされ、認め合う環境で初めて、子どもは自分の底力を開放・発揮できます。家庭を変えることはできませんが、学校・学級環境なら教師たちの努力で変えることができます。間違っても失敗しても大丈夫という信頼感があってこそ、挑戦や冒険もできます。教師が一方的に教え込む授業（トーク&チョークの授業）から、子どもたち主体の授業への変革。子どもたちが間違えることを恥ずかしいと思わず、安心してたくさん間違い、それを共有し、どうして間違ったかを対話・探究できる学習環境。教師があえて間違っ、子どもたちに正してもらいたいのも良いでしょう。このようなアプローチが学力向上には近道であることを、福島県が証明しようとしているように私には見えます。

